

<書 評>

寺本 潔著『感性が咲く生活科』

(1993.5 大日本図書)

環境教育は、狭い意味では環境の様々な物や現象について教えることと捉えられ、広い意味では環境に関わる全ての活動が環境教育であると考えられる。環境教育が明確に意識され始めたのは、環境破壊が進み、生存環境の危機意識からに他ならない。したがってその根底には、環境の改善を目指す共通点がある。

従来 of 行動の結果、環境に問題が生じたのであれば、生存環境の改善には行動をどのように変化させて行くかと言った問題が横たわっている。このような問題意識で環境教育に関わると、ヒトの意識がどのように環境を認識し成長して行くかは最も興味深いところである。

上記の書は、タイトルは生活科である。しかし、著者による長年の子供の観察結果が、全章に示されており、環境教育への重要な提言が含まれている。著者は地理学を専門としており、子供達の手描き地図を手がかりに、子供の心的内面世界の成長や環境世界の認識の発達過程を的確に示している。

評者のおよそ30年間の環境問題への取り組みの結果からすれば、環境問題は各個人の意識の中にどのように問題意識を育てるかにある。日本の場合、それぞれの問題についてはそれなりに盛り上がるが、時間の経過と共に問題が解決を見なくても忘れ去られることが多い。いかにして成長過程で無意識の中にまで問題意識を育てるかが、環境問題の解決に不可欠な要素であると考えている。

子供社会が崩壊し、遊びが伝承されにくくなった今、子供自身は遊びの中で自然に成長する事が困難になりつつある。大人が子供の環境認識の成長を理解し、手助けする必要が生じてきている。著者のユニークな解説も分かりやすいが、子供の手描き地図はさらに分かりやすく、多くの示唆に富んでいる。また学校教育と環境教育をつなぐ好書でもある。

(金森正臣、愛知教育大学)

環境教育のための自然観察

=植原彰氏の著書2冊の紹介をかねて=

①植原彰著『ぼくらの自然観察会』地人書館1992
¥1545 四六版 224ページ

②同 『学校で自然かんさつ』 同 1993
¥1700 同 296ページ

(財)日本自然保護協会では各地ブナ林とか珊瑚礁とかまさに「地球の規模での残すべき自然」の保護に努めると共に、人間居住環境の保全の観点から「身近な自然の保護」を大きな目標として活動を続けている。そのための普及活動として自然観察会活動に力をいれ始めたのは1970年代初期であり、1978年には「自然観察指導員」の養成を普及業務としてスタートさせた。「何時でも、何処でも、誰とでも——自然観察」は香川県の指導員仲間の作ったキャッチフレーズだが、身近な自然を観察することで生活の場を認識し、見直し、或は監視し、確保し、取り戻しと言った行動の元にして欲しいと言うものである。

植原氏は学生時代にこの講習会を受け、地元で指導員連絡会を組織して自ら事務局を引き受け、一方勤め先の小学校でも精力的に活動しその実践を元にして書いたのがこの2冊の本だ。それだけに内容は平易でかつ説得力がある。もちろんやる気が起こるし、すぐ実践できるノウハウまで盛りだくさんだ。

①は一般の心ある社会人にとって、②は環境教育の必要性を感じながら学校現場で何をして良いのかと言う教師の要求に十分応えられるだろう。

自然破壊の反動として自然指向がたかまり、一方、労働時間短縮が余暇を増やし「自然とのふれあい活動」がブームとなっている。しかしそのほとんどが自然破壊行動になっているのが現実で、これがまた我々の新たな仕事を増やしている。例えばオートキャンプがブームだ。本来キャンプは目的である何かを行うための手段であった。しかしいまやキャンプ自体が目的となってそのキャンプで何をするか求められている状態なのだ。

大自然があれば充足されると言う人たちは少なく、多くのキャンパーがキャンプ場にリクリエーション施設を要求する。リゾート業界はそれに対応して開発を進め次々に施設を作る。こうした形に対し我々は自然とのふれあいに施設不要の「自然観察」をと呼びかけているのだ。

「自然観察」は自然系の科学の手段として行われた歴史がある。今我々が行っているのは、「自然保護・環境保全」思想の普及活動を目的としており、当然「理科のお勉強」ではない。

「自然観察ハンドブック」¹⁾に示した通り、観察の対象は自然のみならず人工にも注目することを求めている。「夏がくると思い出して遙かな尾瀬に行く」のではなく「何時でも何処でも」でなければいけないのだ。常に身近な自然の観察がベースであり、豊かな自然での自然観察が身近な自然をより豊かにするための材料としてならともかく、身近な自然の喪失の代償であってはならない筈だ。

「自然観察」によって一つには自然に親しんで欲しいと言うのがある。様々な親しみ方があり、ここではいわゆるフィールドマナーが押さえられる事が重要だ。前述のようにこれが自然に与えるインパクトの大きいのがいま大きな問題であるわけだ。我々としては、例えば何もしないで座っているプログラムで、自然を感じる。くつろぐ。おそれる。なごむ。——などを薦めている²⁾。レイチェル・カーソンは最後の著書「センス・オブ・ワンダー」³⁾で「知ることは、感じる事の半分も重要ではないと固く信じています」と言いきっているのだ。

二つ目には自然観察に依って知って欲しいことがある。それは「自然の仕組み」と「人と自然の関わり」である。自然保護・環境保全を念頭に置くと自然についての知識は生態系の理解が中心となる。そして同時に人の行為が自然に与えるインパクトを見て考えて欲しいとしている⁴⁾。例えば自然の中に捨てられたゴミは即拾うのではなく、まず植生や野生生物に影響の出ていることをじっくりと観察して欲しいのだ。ゴミ捨ての責任が見えてこそ環境教育につながると思うからだ。

いずれにしろ我々は十数年の自然観察指導員養

成の中で理論の整理をし、隣義と実習を重ねてきた。その心で実行しての植原氏の実践記録は「まず行動する」ことの素晴らしいテキストとなる。推薦にためらいは全くない。

参考文献

- (1) (財) 自然自然保護協会、1984、自然観察ハンドブック、 思索社
- (2) (財) 自然自然保護協会、1988、ネイチャー・フィーリング、 思索社
- (3) (財) 自然自然保護協会、1992、小さな自然かんさつ、 思索社
- (4) レイチェル・カーソン、 1991、センス・オブ・ワンダー、 佑学社
(金田 平(財)日本自然保護協会)

〔投稿について〕

本誌へ原稿をお寄せください。投稿に際しては「投稿規定」(Vol. 1, №2またはVol. 2, №2)にしたがってください。原稿には「総説論文」「原著論文」「報告」「資料」「書評」「紹介」「会員からの手紙」などの区分がありますので、そのことを明確にしてください。原稿の分量は原則として400字詰め原稿用紙で論文では50枚以内、報告では40枚以内、その他は4枚以内です。また「学界消息」欄は編集委員会で作成していますが、各地の会員からの情報をお待ちしています。

原稿の送り先は編集委員会事務局(奥付にあり)です。原稿は元原稿1部とコピー2部、計3部をお送りください。原稿は原則として返却しません。図・表は本文と別の用紙に、そのまま写真製版できるようにしてください。本文はワープロのとき1ページ40字40行の体裁です。

(編集委員会)